

寮歌

歌詞に見る寮生の心情、培われる精神
北大らしさとは

本題に入る前に：寮歌雑学

- 寮歌の数：旧制高校の寮歌：2347曲 一高：355曲、四校：163曲、二校：142曲（高橋佐門著「旧制高等学校研究」校風・寮歌論編 p8 昭和出版1978）
- 一高寮歌は明治34年以降、毎年記念祭に複数作られた。
- 都ぞ弥生：初期は「都ぞ弥生の」だった。
- 多くの寮歌が七五調なのに、都ぞ弥生は八七調
(ちなみに早稲田の「都の西北」も八七調)
- 恵迪寮寮歌の歌名は伝統的に歌詞の第一小節からとられるが、「生命の旅路」「時潮の波の」などの例外も数歌ある。「凋落まさに秋深し」は最後の一小節から。
- 恵迪寮寮歌集には献辞がある。「流転劫の死点に立てる人々のために」、「流転永劫の死点に立てる人々のために」、「清纯なる魂に憧れる人々へ」、「清纯なる魂へ憧れる人々へ」
- 多用される言葉：一高：自治>>自由、護国、三高：自治<<自由、北大：自治>自由、自然描写の言葉
- 一高の寮歌集と北大恵迪寮の寮歌集を見比べると、いかに北大が自然環境に恵まれているかがわかる。北大寮歌にはそれだけ豊かで美しい歌詞が多い。
- どの寮歌にも、歌い方の変遷があり、問題にされている。



昭和7年？

四高の名歌「南下軍の歌」の作曲者・築瀬成一：「半世紀近くも歌い継がれてきた間に、川底の石が流れのために丸味を帯びてくるように、その当時の学生に歌いやすいように自然に変わってきたものと思う。そうしてみると、原曲の作者は私だが、南下軍の歌は歴代の四高生の作曲であると言うのが妥当であろう。」

歌い方はこれからも変わるだろう。現在の歌い方で楽譜を固定する意味がない。

寮歌とは何か

人の和するところには歌がある

「寮歌とは、寮生活を中心に、寮生により作られ、歌われた歌」
（高橋佐門『旧制高等学校研究 校風・寮歌論編』 p.4 ）

「寮歌は寮生の共通の寂しさを歌ったものだ」（応援団先輩・
昭和37年入寮・浦口氏が学生時代に発した言葉）

「友の憂ひに吾は泣き 吾が喜びに友は舞う」
（東京大学 明治40年第17回記念祭（東寮）寮歌歌詞）

寮歌とは共感である



寮歌とは共感である

寮歌は歌詞が重要

同じ屋根の下で、同じ釜の飯を食う若者たちの共通の思いが謳われている。寮歌はその時代、彼らが何を感じてきたかを示す生の声である。

- 曲も大切だが、歌詞を理解し、歌われた詩の時代背景を理解し、先人と共感し、歌うことが寮歌の真髄であろう。
- 歌詞の意味を深くは理解せずに、雰囲気だけで歌う人も多いだろう。
- 私もその傾向が強い。それを否定するものではないが、
- 時には歌詞を眺めて、秘められた深い意味や、時代のためにダイレクトに表現できなかった意志の暗喩などに思いを致してはどうだろうか。
- それが理解を深め、共感を増す。
- そうすることで、時代背景も作者の思いも全く違う時代に作られた文章をカッコいいからと言って、別の歌にコピーペーストするような「チグハグ」と「作者に対する無礼」も無くなるだろう。

一高寮歌

- 「寮歌が歌い出している世界はあくまでも憂世、超俗、真理探究、禁欲精進という強さと哲学的深さを讃えた領域であり、詩の分類としては思想詩（ゲダンケンゲディヒト）というべき」（高橋佐門著「旧制高等学校研究」校風・寮歌論編 p 25 昭和出版 1978）
- 明治年間の一高寮歌の中に盛られた価値観
 - ポジティブなもの：自治（165）護国（23）正義（23）
 - ネガティブなもの：栄華（13）濁世（12）世の塵（11）浮世（7）など
- 籠城主義をとっていた初期一高のエリート意識が表現された歌詞。孤高を誇り、世俗を蔑視。
- 護国調：「我立たずんばこの国民をいかにせん」というエリート意識に裏付けされた経世の抱負が歌詞の基調となっている。
- 後、叙情的なものが増えた。藤村操に代表されるような、内面に目を向ける煩悶学生の増加や、新渡戸校長によりソシアリティーと修養が強調された時代、独善的なエリート意識をよしとしない学生が増えたことによるものであろう。
- 一高寮歌は思想詩が多く、北大寮歌は自然描写・叙景詩が多い。他校寮歌はその中間。